



重い過去を背負いながら
支えあって「いま」を生きるハルモニたち
若き女性監督が
映し出す彼女たちの心のつぶやき
語り尽くせぬ数奇な人生

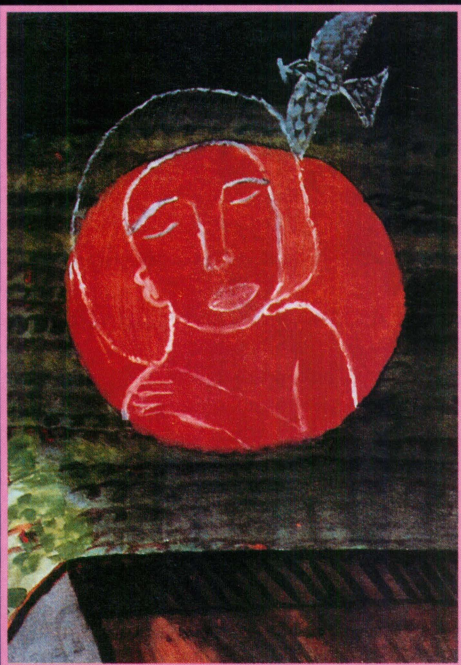
나쁜목소리
The Murmuring
A history of Korean Women

製作・監督○ビョン・ヨンジュ

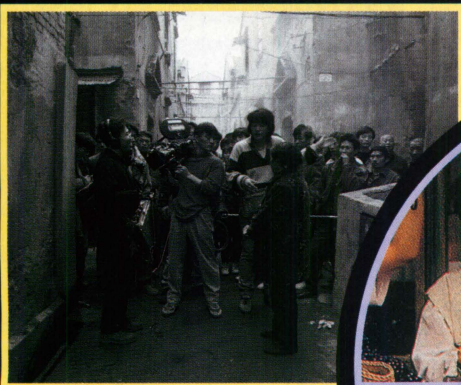
1995年○韓国映画○16mm
○カラー○ドキュメンタリー○98分

ナヌムの家

アジアで女性として生きるということ—2



撮影○キム・ヨンテク 編集○パク・コクチ
録音○イ・ヨンギル
音楽○オ・エンスク○チョ・ビョンヒ
製作○記録映画製作所○ボイム
配給○パンドラ ☎03-3555-3987



..... 山形国際ドキュメンタリー映画祭95 小川紳介賞受賞
95東京国際映画祭・ライブチヒ国際映画祭、96ロッテルダム映画祭・香港国際映画祭招待
..... 日本映画ベンクラブ・優秀映画観賞会推薦



★一人の若い女性ドキュメンタリストが、韓国の現代史を熾烈に生きた女性たちに、
自らの生き方を重ねながら生の意味を問おうとしているその真摯さに、
私は共感する。.....原 一男(映画監督)



1995年○韓国映画○16mm
○カラー○ドキュメンタリー○98分

ナヌムの家

製作・監督○ビョン・ヨンジュ

編集○バク・コクチ 撮影○キム・ヨンテク

録音○イ・ヨンギル

音楽○オ・ユンスク○チョ・ビョンヒ

製作○記録映画製作所○ボイム

日本語字幕○根本理恵

監修○カン・ヘジョン 配給○バンドラ

アジアで女性として生きるということ—2—

かつて「従軍慰安婦」にさせられていた女性たちが共同生活をおくるソウル市内の「ナナム(分ちか合いの意味)の家」。映画「ナナムの家」はこの家に暮らす6人のハルモニ(おばあさん)たちの日常生活を追ひ、心のつぶやきに耳を傾けた作品である。『ナナムの家』はドキュメンタリーとしては韓国映画史上、初めて商業劇場で公開された作品であり、ほとんど宣伝をしなかったにもかかわらず、一か月で一萬五千人もの観客を動員して大きな話題となり、現在は韓国各地や世界の映画祭で上映されている。監督は28才の女性ビョン・ヨンジュ。フィルム・デビュー作である本作品により、95年の山形国際ドキュメンタリー映画祭で、最も前途有望なアジアの監督作品に与えられる〈小川紳介賞〉を受賞し、「カメラの前にも後ろにも、やさしさが溢れている」とその製作姿勢の質を高く評価された。

.....自らを紡ぎ出すハルモニたち..... カムラ(ミュージシャン・在ロンドン)

性 暴力の映画を観た後、私は必ず潜在的テロリストになる。マグナムからライフルひっ掴んで、目に入る男を片ぱしからブツ飛ばす。たとえボーイフレンドでも、今夜は男には指一本触れさせない。怒りのアドレナリンは復讐のシナリオを巡らす。組織したテログループは、いたぶってボロボロにしたオチンチンを大笑いしてチョンと切り落とす。ついでに精神的ダメージを与える効果的一策も必要。

掻き消えた理性がジンワリに戻る頃、私はつくづくと自らの想像力の貧困に気付く。工夫を凝らしたはずのバイオレンス・ストーリーは既に封切り済み——タイトルは「戦争と女」。

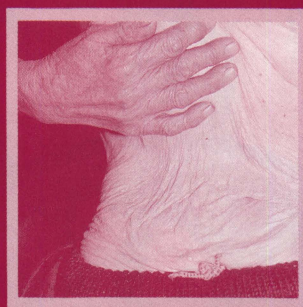
元 従軍慰安婦のドキュメンタリー『ナナムの家』を観にゆくには、覚悟がいった。言語を絶する苦しみを強いられた女達の痛みに対峙すること、侵略国の日本人であること、女であること……真実を知ることはいつも少しヘビーである。

「ナナムの家」には、仏教団体の保護を受けながら、六人の元従軍慰安婦のハルモニ(おばあちゃん)が暮らしている。デモでシュプレヒコールをあげ、堂々と国会で韓国政府の支援を求める表の顔。ネギを刻み、ひとり花札遊びで暇をつぶす裏の顔。足腰の痛み、貧しく恵まれない生活のグチをこぼす年寄りの顔も、日々のスケッチの中で静かに流れる。

し かし、過去のトラウマが浮上する時、静けさに亀裂が入る。

「こんな生活もう一時間もイヤだ。兄弟も子供も飯もいらない。早く死んでしまいたい」と吐き捨てる。その「低い声」(原題)は、深すぎる傷口を封印して生きるしかすべのなかった女達の恨(うらみ)、そして命の叫びだ。

中 国の武漢には、生き残った三人の元従軍慰安婦が、凍てついた歴史の中に生きている。元日本軍の駐屯地には当時の建物がそのまま残る。



「血をしぼられる所」と呼ばれたそこでの生活を語る時、彼女達の恐怖と悲痛は生々しく、観る者の胸をもひき裂く。「中国語も朝鮮語もうまくしゃべれないけど、歌はけっして忘れない」故郷の旋律を口ずさみ踊り出す老女達。死ぬ前に一度故郷へ帰りたい——切なる願いをかなえるために残された時間はあまりに少ない。

監 督のビョン・ヨンジュは、撮影のO・Kが出るまで一年と二か月「ナナムの家」へ通い続けた。当初「出て行け」と拒絶されてから「あんた髪切ったやろ、似あうよ」とボロリとハルモニがカメラの向こうの監督に声をかけるまで、ゆっくり丹念に信頼は築かれた。

氷塊を解かすように、その温もりがハルモニの心の底の何かを溶かし始める。歌手になりたかった若い時の夢、飲んだくれの亭主の死。誰にも言えなかった個人史が開かれる時、彼女達の何かが微妙に変化してゆくことに、観客は気付くだろう。語ること、表わすことを通じてハルモニ達は、自らを自らの手で救い上げているようだ。人生を駆けていた女達が木枯らしの日、たった十人のデモに並ぶ。死にたいと言っていた女性が、来年の抱負を語り、歌い踊る。それは「日本人がまたいつか朝鮮の娘達に同じことをするかも知れない。だから今、私達は事実を明白にする責任がある」ときっぱり言う強さと「名乗り出なければこんな苦労はしなかった。山奥で一人で暮らす」というはかなさの間を揺れながら……

息 詰まるラストシーン。露な肉体を通してハルモニの全存在の今が語られた時、死んだ祖母の裸体が私の中で重なった。風呂の湯気に煙る背中肌の白さと、焼き場で拾った骨の白さ。一カ所だけ黄色味がかかった骨盤の骨は「産めよ増やせよ」と皇国の民を孕み続けた疲れた子宮を抱えていた。

見知らぬ女達が私の中で出会う。ハルモニ生きていてくれてありがとう。

..... Kamura from London

5月18日(土)より待望のロードショー!!

連日	12:50	2:50	4:50	6:50
----	-------	------	------	------

—— 特別鑑賞券1400円好評発売中 ——

【劇場窓口、チケットぴあ、チケットセゾン、各プレイガイドなどにて】

当日 ▶ 一般1600円 / 学生1400円 / シニア(60才以上)1000円

6/8(土)~6/28(金)

連日午前10:30より1回上映!

第七藝術劇場

THE SEVENTH ART THEATER

阪急十三駅西口、栄町商店街徒歩2分左側
サンボードシティ6F ☎06(302)2073

